

大道芸通信

編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

(daidogeikib.biglobe.ne.jp) [http:// daidougei.secsaa.net](http://daidougei.secsaa.net)

朝顔に釣瓶取られて もらひ水

言うまでもなく江戸中期に活躍した女流俳人加賀千代女(一七〇三〜七五)の著名な俳句である。

朝の水汲みをしようとしたら、釣瓶に朝顔の蔓が巻き付いていた。蔓を切るか解くかして外すことは簡単だが、ようやく巻き付いたものをむげに外すのもかわいそうだ。今朝はお隣からもらい水をするにしましよう、と。千代女の優しい心持を唄ったものとされている。

その通りなのだが、私が気になるのは釣瓶の方である。

釣瓶は井戸水を汲むとき

に使う網付きの桶のことである。一番簡単なのは、網の端を掌に持ち、反対側に桶を結びつけて水中へ桶を投げ入れる「投げ釣瓶」である。手で投げる代わりに石の重量を利用したものが「跳ね釣瓶」である。(下図・ネット検索)

跳ね釣瓶

(ネット)



加賀千代女像

磯田湖龍斎



ほかによく見かけたものは頭上に滑車を附けた「二岐釣瓶」がある。

二岐釣瓶二種 (ネット)



「これじゃこれじゃ。これなら朝顔の蔓も簡単に巻き付けられるじゃろう」
思わずそう口走ってしまったほど感動した。

なお「照代勝覧」画中の「水売り」が、わざわざ邪(と称していた)に砂糖を溶かした水で、汲み立ての井戸水で、白玉団子を三つか四つ浮かべたものを、銅か真鍮製の器に入れて、こちらも一杯四文で売っていた。

冷や水売りといふ太夫

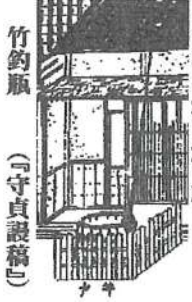


しかし、何れの釣瓶も朝顔の蔓が巻き付くには大変なものである。どうしたものか考えていたら、『照代勝覧』の画中に「竿釣瓶」を持った「水売り」へ目がとまった。

水売り (照代勝覧)

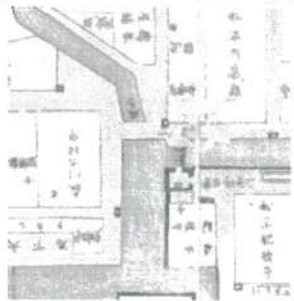


竿釣瓶の現物を実際に見たことはないが、『守貞謄稿』が載せる「江戸の家宅」図の中にも「竿釣瓶」を描いたものがあるのを見つけたときはうれしかった。



竹釣瓶 (守貞謄稿)

辰口付近 (切絵図)
いた江戸城内濠の余水を伝馬船に積んで運んでいた。



ところが当時は冷蔵庫のない時代である。冷たい井戸水もすぐに温もり、冷たいのはた。水売り人の水仕入れ先金属製の桶(入れ物)だけでは、江戸城の和倉門外つた。だから「ぬるま湯を辻で売る暑いこと」などと皮肉られてもいた。

何れにしろ、水を巡っては様々な苦労と工夫がなされた。江戸も中期以降は掘り抜き井戸の技術が上方から伝わり、徐々に技術も向上したから、より深い井戸を掘れる様になった。上図の釣瓶を持った「冷や水売り」は、そのことを自慢し強調したかったのであらうか。